

## 教職員の資質・能力の向上に向けた 多様で充実した研修の場の提供を

副会長 七條 正典



第九十九回  
大会における  
総会の議を経て  
副会長の任  
を務めること

になりました。会長を補佐する立場  
ではあります。その役目を果たす  
には不十分な点もあるかと思えます。  
会員の皆様のお力添えをいただき精  
一杯務めたいと存じます。何卒よろ  
しくお願いたします。

### ●大きな転換点を迎える学会

昭和三十三年に「道徳の時間」が  
特設されてから六十年余を経て、道  
徳が教科化されました。そして、日  
本道徳教育学会は、本年秋季に第百回  
大会を迎えます。今時代は大きく変  
わろうとし、道徳教育も大きな転換  
点を迎えつつあると思われま。

新たな時代の創造に向け、私たち  
の学会は何ができるのか。第百回大  
会では、「持続可能な社会を実現す  
るために道徳教育に何ができるか」  
をテーマに掲げ、次世代につながる  
道徳教育の在り方を問いかけていま  
す。

### ●香川大学教育学部における 「道徳ラボ」の開催

本年八月、香川大学教育学部にお  
いて、日本道徳教育学会四国支部と  
の共催により「道徳ラボ」という研  
修会が開催されました。この「道徳  
ラボ」は、独立行政法人教職員支援  
機構の「地域センター支援事業」と  
して「四国地域教職アライアンス香  
川大学センター」が主催者となって  
開催された広域連携型研修で、香川

大学教職大学  
院、香川県小  
学校道徳教育  
研究会も共催  
団体として参  
加しています。  
つまり、大学  
や学会、行政  
(研修機関)、  
学校現場が一  
体となって開  
催された研修  
会でした。

そして、こ  
の研修会には、

独立行政法人教職員支援機構連携教職大学院を対象とする地域センター支援事業

道徳ラボ 2022  
オンライン (ZOOM) との併用  
テーマ「校内研修の充実」  
日時 令和4年 8月 6日 (土曜日) 13:00 ~ 16:15  
場所 香川大学教育学部内 四国地域教職アライアンス 香川大学センター (教授法演習室)

香川大学教職大学院HPより

道徳教育について実践研究を行って  
いる四国各県の現場の教員、大学や  
研究機関の教職員を中心に、オンラ  
インにより全国各地からも参加して  
いました。つまり、この研修会は、  
研究者や実践家がそれぞれの所属ご  
とに分かれて行う研修ではなく、そ  
れぞれの課題や関心を基に、互いの  
所属や専門領域の特性を發揮しなが  
ら学び合う、主体的・協働的な参加  
者による学びの場となっていました。

### ●学会として、個別最適で協働的 な新たな学びの場の提供を

現在、教職員の資質・能力向上を  
図る上で、研修の在り方が大きな課  
題となっています。今回「道徳ラボ」  
では、道徳教育における「校内研修  
の充実」をテーマに掲げていました。  
令和の日本型学校教育で子どもたち  
に求められている個別最適な学びと  
協働的な学びの往還は、教師の学び  
にも求められています。今後、学会  
に求められる役割として、教師自身  
が自らの関心や課題に応じて、個別  
最適な学びや学校種・専門性を越え  
た協働的な学びを通して、教員とし  
ての資質・能力向上を図る多様で充  
実した研修の場を提供することが大  
切になるのではないかと考えていま  
す。

(高松大学)

### 学会ノート

「考え、議論する道徳」を掲げ、授業  
の質的転換を求め、「特別の教科 道  
徳」がスタートして、小学校では五  
年、中学校では四年が経過した。

教育現場では、現在までさまざまな  
方法が試みられ、議論されるようにな  
った。その結果、道徳の時間を確実に  
に担保すること、質的に充実を図るこ  
とという教科化の当初のねらいはお  
おむね達成できたといえよう。新型コ  
ロナウイルス感染症拡大のため、その  
推進力が低下することが懸念された  
が、むしろそれを追い風とするように  
ICT機器を駆使し、全国の先生方が  
つながり、さまざまな情報交換がおこ  
なわれるようになった。

オンラインは、ICT機器を通じ、  
空間を越えて、瞬時につながり合うこ  
とができる(即時性)。一方、対面で得  
られる登壇者の熱い思いや表情、参加  
者と構成する空気感などは、伝わりに  
くい(身体性)。

今後、オンラインと対面をコラボさ  
せながら、質の高い研修、授業、づくり  
をおこないたい。

(木下 美紀)



## 文部科学省における道德教育の新しい動き

令和四年度小学校及び中学校各教科等担当指導主事連絡協議会の小学校道德部会を六月十三日(月)、中学校道德部会を同十四日(火)に開催しました。

これは、都道府県及び政令指定都市の道德教育を担当する指導主事の方々等にご参加いただき、文部科学省からの行政説明や指導主事の方々に研究協議等を行っていただくものです。今回は、対面での参加とリモートでの参加を組み合わせた形式で実施しました。

午前中は、小学校道德部会、中学校道德部会ともに、会報第七十三号でお伝えした「令和三年度道德教育実施状況調査」のうち、小学校、中学校のそれぞれに焦点を当てながら結果の概要について説明を行いました。その後、「今年度の道德教育に関する施策について」と題して、各自治体で実施する道德教育に関する研修会や指定校事業などについて、ねらいや概要等を、小グループに分かれ意見交換を行いました。

午後の小学校道德部会では、「道德科の授業における指導と評価の一体化」と題して、行政説明を行いました。「令和三年度道德教育実施状況調査」の結果を踏まえながら、道德科の授業において児童の学習状況を見取る「評価の視点」を設定することの重要性に

ついて、また、評価を踏まえ、教師の授業に対する「評価の観点」についての説明を行いました。

指導は、子供が自らのよさや成長を実感できるように工夫するものであり、評価は、子供の成長を願って行われるものです。したがって、子供にとって心の成長につながる一番の評価は、信頼できる先生に認められることであるとの確認がなされました。その後、「道德科の授業における指導と評価の一体化についての課題とその対応について」と題して、活発な研究協議が行われました。

一方、中学校部会では、午後から「中学校道德教育におけるカリキュラム・マネジメント」と題して、行政説明を行いました。「令和三年度道德教育実施状況調査」の結果を踏まえながら、道德教育を通じて育成を目指す生徒像を明確に設定するとともに、学校の実態に応じた指導体制の充実、また、「社会に開かれた教育課程」の実現を踏まえた家庭や地域との連携の重要性について説明を行いました。その際、道德教育を充実させるためには、特に、校長のリーダーシップが重要であることの指摘を行いました。その後、「中学校道德教育におけるカリキュラム・マネジメントの課題とその対応について」と題して、活発な研究協議が行われました。

(教科調査官 飯塚秀彦)

## 事務局からのお知らせ

### 令和四年度 第一回評議員会の報告

本年七月一日(日)に第一回評議員会がオンラインで開催された。新たに委嘱された評議員二十五名による最初の会議であり、会長はじめ、副会長、常任理事、監事も参加した。

永田会長のご挨拶の後、参会した全員が自己紹介を兼ねて道德教育の現状等についての意見を述べた。事務局より学会の現状と令和四年度の学会支部活動補助金の申請状況について説明した後、永田会長の司会で議事を進めた。

議事の前半は、北海道支部から順に九つの支部の令和三年度の活動状況及び令和四年度の活動計画について、資料及び口頭で報告と説明があった。二〇二〇年からのコロナ禍の影響によって支部活動が停滞気味であったとの報告が続く一方、令和四年度にはオンラインなどの活用によって、積極的な支部活動を展開する具体的な計画案も紹介された。

また、コロナ禍とは直接関わりがないものの、①支部会員の減少、②会員の高齢化、③世代交代の必要性、などの課題が多く示された。これらは、以前から提起されたものであり、全ての支部に共通する課題である。こうした状況にコロナ禍が追い打ちをかける結果となっており、各支部の抱える問題状況の克服は、各支部だけではなく、学

会が全体で取り組むべき喫緊の課題であるという認識が共有された。

議事の後半は、まず事務局から、①学会の会員数が減少傾向にあり、年齢構成が逆ピラミッドに近い形となっているために、今後は会員数の減少が加速する可能性があること、②学会支部活動補助金のあり方について、理事会で継続的に検討することが決定されたこと、③各支部の会則の整備や、HPの作成等を含めた情報発信の現状について説明があり、その後、学会活動のあり方や充実方策についての意見交換が行われた。

主なものとしては以下の通りである。  
①オンラインを活用した地区を超えた活動の推進が、学会の活性化につながるのではないかと。②自由研究発表を積極的に働きかけることが効果的ではないかと。③学部段階から学会への情報に触れる機会を働きかける必要があるのではないかと。④免許更新制の廃止を踏まえ、学会としての研修体制づくりを検討すべきではないかと。⑤新たな支部組織の設置についても検討すべきではないかと、などの意見と提案が出された。

最後に、七條副会長から、各支部活動の活性化が学会会員数の増加につながるため、そのための継続的で積極的な検討が必要であるとの発言があった。

(学会事務局長 貝塚茂樹)



## 2022(令和4)年度春季(第99回・東京家政大学)大会報告

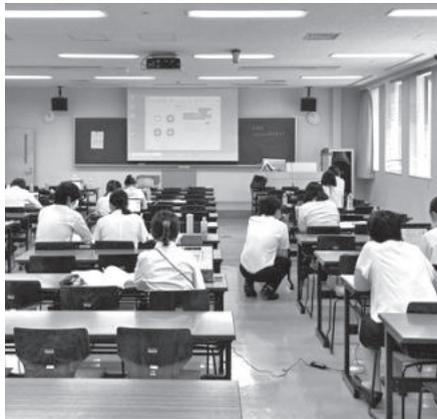
二〇二二(令和四)年春季(第九九回)大会は、東京家政大学をホストとして、「道徳教育を科学する」というテーマのもと、二〇二二年六月二六日にオンラインで実施させていただきました。本学会では、二〇二〇(令和二)年春季(第九五回)大会を実施させていただき、予定でしたが、同年一月頃から感染が広がってきたCOVID-19によって、本学会としてははじめての紙上発表とさせていただきます。ただ、その直後から改めて本学で開催してはどうかというお話をいただき、今回オンラインでの開催となりましたが、ようやく開催させていただきました。短期間に複数回の大会を開催させていただいた理事會及び会員みなさまに感謝申し上げます。また、本大会には、文部科学省、東京都教育委員会、板橋区教育委員会、北区教育委員会、全国小学校道徳教育研究会、全日本中学校道徳教育研究会、全国公民科・社会科教育研究会に後援を、一〇社に協賛をいただきました。この場をお借りしましてお礼申し上げます。

さて、本大会には、全国から二五二名の申込をいただきました。多数の御参加をいただきましたこと、改めてお礼申し上げます。以下では、本大会での基調提案、自由研究発表、シンポジウム、

懇親会の概要を報告させていただきます。

### 基調提案・自由研究発表

基調提案では、行動生態学、特にウニの行動科学が御専門の、本学環境教育学科の宮本康司先生に「科学教育からみた環境教育と道徳教育」というテーマでお話しいただきました。ウニの研究に着手した経緯からモラル・シンキングを主題とした研究に至るまでの御自身の研究履歴をたどりながら、道徳教育を「科学的に」検討されてきた研究、特に因子分析にもとづくモラル・シンキングの四つの項目を御紹介いただきました。



大会校の運営の様子

また、自由研究発表では、一四の分科会に分かれ、六三件(三件の発表辞退を除く)の、多様な研究が報告され、活発な御議論をいただきました。自由研究発表ではありながら、大会テーマに関わる内容の御発表を多くいただい

たことは会員のみなさまのニーズになった大会であったのではないかと感じております。

### シンポジウム

シンポジウムは大会テーマと同様のテーマで、司会の荒木寿友先生(立命館大学)のもと、足立佳菜先生(佐賀大学)、東風安生先生(横浜商科大学)、萩野奈幹先生(兵庫県立教育研修所)、古見豪基先生(埼玉県和光市立第五小学校)にシンポジストとして御提案・御議論をいただきました。冒頭、荒木先生から「科学する」ことの内実は、必ずしも自然科学的・帰納的方法にのみ依拠するわけではなく、道徳教育実践・研究独自の方法が求められるという問題提起が行われ、その後、各シンポジストからそれぞれの研究・実践履歴に即しながら、「科学する」ことの内実について提案していただきました。主催者の見込の甘さから、質問への応答、シンポジスト間での議論だけで、フロアの参加者を交えて深く議論する十分な時間を設定することができませんでした。その点はお詫び申し上げるしかありませんが、道徳教育実践・研究のあり方を正面に据えてシンポジウムを開催したことは意味があったのではないかと思います。



### オンライン懇親会

本大会では、第九六回大会からオンラインでの開催を継続してきた本学会としてははじめての試みとして、SpatialChatというサービ



SpatialChatによるオンライン懇親会

スを用いてオンラインでの懇親会を実施しました。ZoomなどのWeb会議システムでは、主催者の割り振りに従ったグループに分かれて会話をを行うことしかできませんが、このサービスでは話したいと思う人に近づいていくと、その人と話すことができます。オンラインばかりで個別で話す機会が少なくなってきたため、学会員相互の交流が少しでもできればと思い、設定させていただきました。短い時間でしたが、参加された方は久しぶりの懇親の場を楽しんでいたただけなようでした。

最後になりますが、本大会の運営に当たっては、神奈川支部の会員のみなさまには多大な御尽力をいただきましたことをこの場をお借りしてお礼申し上げます。

(第九九回大会運営委員長 走井洋一)



## 学会支部活動の紹介



## ●北海道支部●

四月に総会を開催し、支部長に平野良明(札幌国際大学)、事務局長に高原健(札幌市立信濃中学校)が選出され、事務局を札幌国際大学安井政樹研究室に置くことなどが承認されました。ホームページを開設したり、広い北海道をカバーするために学習会をハイブリット化したりするなど、これまで以上に支部の活動を活性化させていきたいと考えます。

十月には文科省教科調査官浅見哲也先生をお招きしての学習会も予定しております。ハイブリット開催としますので、ぜひご参加ください。

(安井政樹)

## ●東北支部●

令和四年五月、日本道德教育学会において空白地帯だった東北六県に『東北支部』を設立しました。東北の道德教育の発展に寄与することを目的とし、学習会を開催しています。今後の予定は、ウェブサイトでご確認ください。東北支部への参加を募っています。各県の理事又は事務局までお願いします。

○岩手…佐々木哲哉・紺野好弘

○宮城…佐藤郷美 ○秋田…小野隆裕

○山形…佐藤幸司

○福島…渡邊真魚・藤原謙

●支部長…毛内嘉威

事務局…佐々木篤史・山田将之

(毛内嘉威)

## ●新潟支部●

新潟支部は、廣川正昭(元開志学園高等学校校長)を支部顧問、林泰成(上越教育大学長)を支部長として、活動しています。支部大会は年一回開催しています。大学教員や学校教員ばかりでなく、一般の方々にも声をかけ、興味をお持ちの方には参加していただいています。支部広報誌(小型の新聞タイプのもの)は年一回発行しています。ただし、残念なことに新型コロナウイルス感染症の拡大の後は、支部大会を開くことができていません。令和四年度は支部大会や支部広報などを元活動に戻すことを念頭に、鋭意準備を進めております。

(丸山隆之)

## ●神奈川支部●

「ベテランと若手が響き合う支部活動」創設十周年を迎える神奈川支部では、毎年、春季道德フォーラム、年末の支部研究大会、年間四回の学習会、夏季会員研修会等を開催しています。

また、会員相互の研究発表の場として研究紀要『道標』を毎年度末に刊行しています。それらの活動を支えているのは、経験豊富なベテランとやる気漲る若手会員との意図的な協働体制です。神奈川支部の組織力を支えるのは、思い溢れる会員一人ひとりの組織貢献力です。

(田沼茂紀)

## ●愛知支部●

例年のように、講師を招いての二回の講演会(五月・十二月)、支部会員の実践報告を兼ねた二回の研修会(九月・二

月)という年間四回の活動を計画。しかし、コロナ禍の中、五月の講演会を会員間の情報交換の会に変更しました。その中には、教科化を控えた頃のような道德の授業に対する「熱」が冷め、小中学校では授業が停滞しているとの報告がなされるとともに、支部として、道德科の魅力を発信し続けること、実践を積み上げることが大切であることが確認されました。

(権田昭)

## ●近畿支部●

近畿支部の組織・体制は、学会副会長の柴原氏をはじめ五名の顧問の先生方と会員六九名(内名誉会員二名)、出版関係の賛助会員三社で構成。岡山県や山口県からも参加。令和四年度で創立十三年になり、杉中支部長を中心とした体制も六年目になります。

活動は、総会と年三回の学習会、セミナー、同人研究誌『道德教育研究』(既刊七号)が主で、学習会では授業理論、研究発表を行います。セミナーは会員外にも門戸を開き、授業作り講座、模擬授業などを実施しています。

(松原弘)

## ●岡山支部●

第九九回大会総会で本学会の課題として「会員の高齢化」と「年齢構成の逆三角形化」が指摘された。岡山支部では、それらに「支部活動への参加者の減少」が加わる。その傾向は年四回定例研究会を開催していたコロナ禍以前にもあったが、コロナ禍により決定的となった。その要因は活動の魅力不足にある。人が

多忙を押ししても参加するのは「授業に役立つ活動」であり「道德教育への意欲を喚起する活動」であろう。今後の活動はこれらを踏まえて行う必要がある。

(秋山博正)

## ●鳥取支部●

第三三回鳥取県道德教育研究大会は、県版新型コロナウイルス警報発令により急遽中止した。八頭町立船岡小学校の杉谷義和教諭(六年生)による公開授業(ビデオ公開)、「星への情熱〜本田實〜」(八頭町の道德)等の準備を終え、三年ぶりの開催を待つだけであった。

ビデオ公開と研究会は、県東部小学校道德部会研修会で実施していただいたが、支部でも人物教材による授業研究会を設ける予定である。

他の活動予定に、毎月開催の「師道塾」と新ホームページの開設がある。

(前田哲雄)

## ●四国支部●

四国が順に開催県となって年に二回、学習会を催していましたが、コロナ禍の近年は、香川県を開催地としてハイブリット方式で会を行っています。会では、ICTの活用やいじめの問題など現代的な課題をテーマに実践等を交流しつつ、常に道德の本質に立ち返って研鑽を深めています。また、令和二・三年度には、実践研究論文等を掲載した機関誌『道德教育の実践と研究』も発刊し、「四国は一つ」の合言葉のもと、七條支部長を中心に協力して活動を行っています。

(森有希)

「主体に切り結ぶ」教育方法論を  
提唱し続けた教育学者

吉田昇

吉田昇は、明治時代から続く名家井上家に生まれ、そして教育界の大御所、吉田熊次(東大教授)一家の養子と聞く。東大卒業後、お茶の水女子大学の教授として活躍し、教育界をリードしていた。学生に人気があり、知名度も抜群で、行動する教育学者であった。吉田ゼミはいつも大盛況。

研究者としての業績も多大で、著書では、『現代学習指導論』(明治図書)等、多数に及ぶ。吉田の主張は、「子供の主体にどう切り結ぶか」である。

これは、吉田教育学の一貫したテーマで、氏の教育方法論を端的に示したものである。研究会等、全国を飛び回って活躍した。なかでも、特記しておきたいのが、日教組主催の「教研集会」であった。指導講師団に、常に吉田の名前が出る。研究室でも、この話題は尽きなかった。

どうして「教研」か。時代もあっただろうが、長い間の疑問であった。自宅を私的に訪問し、ゼミにも参加するなどしているうちに、その疑問は解けた。

大学院での吉田ゼミであるが、現場教師も参加していたことで、院生との道德教育論を交わす論争までにはい

日本の道德教育を築き上げた人々76

ないが、大変なことであった。教育界、大学には、未だ道德教育へのアレルギーが残っていた時代、その火中に飛び込んだ筆者は、「火だるま」になりかけたことを今でも忘れられない。本道の道德教育の研修になったことだけは間違いない。これも、吉田教授の仕組まれた研修方法だったのだと、今にして気づく。

さて、本論の吉田の道德教育論であるが、『教育学全集15(道德と国民意識)』(小学館)の結章で、吉田の道德論が展開されている。その内容については省略するが、一読をお勧めする。ここに、吉田の「主体に切り結ぶ」道德教育論が明解に、しかも分かりやすく展開されている。

なお、この全集のことは、吉田から当時の苦労話をよく聞かされていた。

早速購入し、自宅の本棚の中央に据え、愛読し、当時を偲んでいる。

最後に、現職中、残念ながら死亡された。後日、先生を偲ぶ会が行われた。大学時代の友人である日銀理事の方と追悼の辞を読んだことが忘れられない。

(元開志学園高等学校長 廣川正昭)



私の実践 子どもの「おたずね」を軸にした道德科授業

ICTを活用した個別最適な学びと協働的な学びの「一体化の実現」  
兵庫県尼崎市立潮小学校 由良健一

一 子どもの「おたずね」について

子どもの「おたずね」とは、子どもが友達の見聞や話の内容に対して疑問や違和感、素朴に聞きたい事を尋ねることを指す。そして、時には子どもと教師と一緒に考えるきっかけになるものとする。

現在の道德科の授業のほとんどが、教師の発問に子ども達が答える展開である。佐伯は以下のように述べている。

学問というのは問う事の学習である。つまり、授業においても、子どもたちが常に「問われる存在」だけでなく、「問う存在」へと変わる必要があるのではないか。対話から「問い」が生まれ、またその「問い」を基に他者と対話するという「学び方」を身に付ける必要があるといえる。

その「学び方」について令和の日本型学校教育では「個別最適な学びと協働的な学び」とした。しかし、現場ではこれらを実現するにはどうしたらよいか。さらにこの二つを一体的に考えることの難しさも感じている。

二 ICTを活用した個別最適な学び  
道德科には教科書ができ、授業までに教材を読んでいる子どもがいる。一方で、読むことが苦手な子どもは教材を読んだりはいしない。つまり授業まで

に理解の差が生まれているといえる。

そこで、授業までに教材について子どもたちが感想や疑問に思う事をまとめるようにする。この感想等をGoogleドキュメントにまとめGoogle Classroomに出す。そうすることで子ども同士も見合うことができる。また、教師は子どもの感想や疑問に思う事をもとに授業の展開や発問の仕方を考えることができる。

三 子どもの「おたずね」を軸にした協働的な学び

授業にはねらいがあり、ねらいに迫るために子どもの事前学習の疑問などを基に展開を作成し、教師が発問する。子どもの「おたずね」を軸にした協働的な学びとは、教師の発問に対する子どもの発言に対して、子どもが「おたずね」する授業である。「なぜ」と思ったんですか?」など、子どもの発言に対して子どもたちが疑問に感じたことを「おたずね」しながら授業が深まっていく。

以下に授業記録を示す。

「僕たちの学校」授業記録(下:教師、C:子ども)

T:ここで(事前での)質問があったんやけど、別に校歌を歌わなくてもいいのに何で校歌を歌った?

C1:校歌って学校の歌やから、学校を再

C2: 校歌ってその学校にしかない。一年生を泣き止ませたかったし、自分たちだけの曲だから。

C3: 例えば世界に一つだけの宝物は特別なものだから、校歌も世界の一つだけの歌だからそれと同じように歌っている。

C4: 世界に一つだけの特別って言うけど、アンパンマンだって世界に一つだけの特別な歌なのになんで校歌を歌うんですか？

C5: 例えば〇〇小学校の校歌には自分の学校の名前が入っているけどそれは自分の学校にいる人しか歌えない。

この教材は福島県の道德の副読本で「愛校心」の授業である。子どもたちの事前学習の「おたずね」で多かった「なぜみんながつらい時に校歌を歌うのか？」を発問として用いた。発問をきっかけにC4の子どもの「おたずね」が生まれ、自分たちの学校へとつながっていった。

教師の発問は発問的なものである。つまり子どもの事前の「おたずね」から探求が始まり、教師の発問によって触発され、対話から子どもの「おたずね」が生まれ、深い学びへとつながる。「問い」についてさらに研究をし、子どもと教師で共に創る道德科の授業実践を進めていきたい。



### 道德教育研究・実践の探訪 全国大会校編

全国小学校道德教育研究会・全日本中学校道德教育研究会

#### 福井市中藤小学校の紹介

全小道研会長 小西 祐一

今年度、第五十八回全国小学校道德教育研究大会福井大会の会場校は、福井市中藤小学校です。同校は、児童数七三四名、教職員五七名の規模をもつ学校です。明治六年創立の歴史をもち、福井大学教育学部と連携して各種研究開発を行い、今日的な教育課題に応えてきました。道德に関しては、平成六年に文部省、福井県教育委員会、福井市教育委員会より道德教育推進校の指定を受け、翌平成七年十一月には研究発表会を開催しています。

学校教育目標は、「ありがとの中の藤」をスローガンに、「人との出会い・つながりに感謝しながら、自ら学び自立する子どもの育成」を掲げ、研究主題「互いに認め合い 共に学び合う」自己との対話、他者との対話を通して、学びを深め、よりよく生きる」のもと、精力的に研究活動に取り組んでいます。先日、八月五日に、全小道研会長、同事務局長、福井県小学校道德教育研究会会長とで、中藤小学校を訪問し、御挨拶方々、全国大会に向けた進捗状況等をお聞きしました。

中藤小学校は、広々とした校舎に施設・設備が十分に整えられ、申し分ない教育環境の中で、日々教育活動が展

開されていることをうかがい知ることができました。

校内では、ちょうど全国大会当日の授業づくりについて、分科会ごとに検討しているところでした。各教室には板書の工夫など研究を深めた跡が残されていて、当日の授業公開が今からとても楽しみになりました。佐藤勉校長先生のリーダーシップのもと、着々と全国大会の準備が進められています。当日はぜひ、多くの皆様にご参加いただけますよう、どうぞよろしくお願いいたします。

#### 山形市立第三中学校の紹介

全中道研会長 月田 行俊

##### 一 学校の概要

全国大会校の山形市立第三中学校は、生徒六二〇名二六学級で、市中心部に位置しています。山形駅から徒歩三分という立地もあり、数々の全国大会の会場校となる学校でもあり、今年度の道德科、五年度は保健体育科、六年度は技術・家庭科の全国大会の会場校となっています。

##### 二 全国大会山形大会に向けた取組

大会に向けて、「コロナ禍でも研修の歩みは止めない」という、全中道研の方針を受け、限られた条件の中で次のように研修を進めていただいています。

### ◆よりよい授業づくりに向けた研修 析のために

令和二年度より、山形大学地域教育文化学部の吉田誠教授にご指導をいただきながら、教材分析をもとに、子供たちの思考を大切にしたい授業づくりに取り組んできました。全国大会では、その成果を若手教員三名による授業提案という形で発表していただきます。



##### (一) 教科書の効果的な活用のため

昨年度は、「あすを生きる」のデジタル教科書の効果的な活用について、そのアイディアやアドバイスを含めて研修を行っています。その研修を踏まえ、日々の授業においてもICTの効果的な活用に取り組みながら実践を積み重ね、授業の質の向上を目指しているところです。

##### (二) 外部研修について

昨年度、全中道研が主催する「道德教育推進教師育成講座」に二名の教員が参加し、全国の先生方と指導案作成に関する演習等に取り組みました。その内容を校内で伝達講習をしたことも本校の指導方法の改善につながっています。(山形市立第三中学校長 井上賢一)

## シリーズ・日本の道德教育への提言 学校における

椋木 香子

道德の教科化が歴史的に見て重要な転換点であったことは間違いないだろう。しかしながら、教科としての教育内容にあたる内容項目の枠組みや、道德科の授業が週一回行われるというカリキュラム自体はあまり変更がなかった。今後は内容論やカリキュラム論を含む「道德教育学」の構築が必要だと考えられるが、ここでは学校における道德教育の充実に向けて、いくつか提案したい。

第一に、内容項目の位置付けの再検討である。我が国では長らく、一つの教材(資料)で一つの内容項目について扱う、という考えが一般的であり、教科書もそれに対応する形で作られている。しかし、一つの教材で複数の内容項目について考えることが効果的な場合もある。現行の学習指導要領でも内容項目を関連的、発展的に捉えて指導を工夫するよう指摘されているが、より柔軟に複数の内容項目について学習できるように、教科書のあり方も含め、内容項目の位置付けについて検討すべきであろう。

第二に、授業の位置付けの再検討である。例えば、「郷土を愛する態度」は地域の人々や文化と関わる中で育まれ

る。道德科の授業の中で教科書を使って教えなくとも、総合的な学習の時間等での体験活動を通して考えたことや感じたことを道德科で振り返り、思いを共有することも「郷土を愛する態度」を育むことになるのではないだろうか。これまででは、そのような活動は道德ではないとされてきたが、体験活動の振り返りや共有も道德授業として認められると、子ども達が道德的諸価値について自分事として考えやすくなるだろう。

第三に、先述の二点とも関連するが、柔軟なカリキュラムの容認である。学習指導要領では現代的な課題を取り扱う場合に、問題解決的な学習を行ったり、様々な道德的価値の視点で考えさせたりすることを求めているが、その場合、一時間で授業を終わらせることは難しく、表層的な議論で終わってしまうこともある。また、そのような課題は他教科等と関連させることが望ましい場合も多い。現在でも重点的指導の工夫が求められているが、特定のテーマに基づく単元構成など、道德科の授業を柔軟に設定できると良いと考える。

学校教育において道德教育がコアになることが子どもの成長・発達にとって大切だと考える。「特別の教科」という特性を活かし、学校における道德教育と道德科の関連がより効果的になるような道德教育・道德科のあり方を模索したい。

(宮崎大学)

## 会員の声 (私と学会) 初めての大会運営

和井内 良樹

昨年、オンラインではありますが、令和三年度春季日本道德教育学会、第九十七回大会を宇都宮大学で開催させていただきました。多くの方々のご協力をいただきましたこと、改めて感謝申し上げます。

さて、私が初めて学会の大会運営に参画させていただきましたのは、平成六年度春季、第四十三回大会を東京学芸大学で開催したときでした。平成六年六月二十六日、二十七日の二日間で行われました。大会運営委員長の石川侑男先生のもと、私は運営事務を担当いたしました。当時は、私が東京学芸大学附属小金井小学校に新卒で着任して五年目の年でした。教職や道德のこともまだまだ勉強中の身でしたので、何も分からないまま、関係の先生方にご指導いただきながら大会運営を何とか進めて参りました。日本大学文理学院の小野健知会長先生の研究室を何度かお訪ねしては、小野先生をはじめ、学会本部の先生方から大会運営に関して実に多くのご示唆やご援助をいただいたことを思い出します。

現在では、文部科学省及び各教育委員会などの後援認定は常態化しておりますが、当時はまだそれがなかったように思います。初めて文部省及び東京都教育委員会の後援申請を行い、後援

認定をいただきました。都庁に足を運び、担当の指導主事の先生に手続き上の留意点をお伺いしたり、文部省教科調査官の押谷由夫先生からも温かなご指導をいただいたりいたしました。

大会一日目は、附属小金井小学校の児童を対象にした公開授業を、永田繁雄先生に行っていただきました。二日目は、大学芸術館ホールを会場に、真仁田昭先生にご講演いただき、そして研究発表及びシンポジウムが行われました。二日間を通じて、のべ三百五十名近くの参加者があり、熱い議論が展開されたことを覚えております。

現在では、研究発表者や司会者、シンポジストとのデータのやり取りや打合せ等はオンラインですが、当時は発表原稿の受け取りはプリントアウトしたものを郵送するというものでした。発表要旨集は学校で印刷したものを業者に製本してもらっていました。多くの方々から、たくさんのお力をいただきながら、また、気持ちの面でも大いに支えられながら、何とか乗り切ることができたと思います。今でも、私にとって大変貴重な経験だったと思っております。

(宇都宮大学)



### 道德授業実践講座 竹内善一先生の巻②

#### 道德授業の成否は教材にあり

#### 子供の声を聞け

教育において大切な要素は教師、教材、指導法である。今回は教材について考えてみよう。まず、子供が道德授業をどう捉えているかを検証してみよう。子供の多くは道德を大切な教科として捉え、道德授業も楽しいと感じているが、逆にわずかではあるがあまり必要を感じない楽しくないと感じている子供がいるのも事実である。道德はそうした道德を楽しくないと捉えている子供にこそ真剣に向き合って指導をする必要がある。

道德が楽しくないと答えている子供にその理由を聞くと、その原因の多くが教材に有ることが分かった。調査資料が少し古いが、平成十年六月の中教審の答申「新しい時代を拓く心を育てるために」で引用された「道德授業についてのアンケート調査」(平成七年金井他)によれば、子供が道德の授業を楽しくないと感じる理由として「いつも同じような授業だから」、「こうすることがよいことだとか、こうしなければいけないということが多いから」、「資料や話がつまらないから」、「始めから分かっていることしかないのだから」、「感動したり、考えたりすることが少ないから」、「自分が本当に知りたいことが学べないから」といった点を多く挙げており、教材の在り方が道德教育の学習に対する子供たちの興味・関心を失わせる

大きな要因になっていると指摘している。その後、このような調査は行われていないようであるが実態は変わっていないだろうと思う。

#### 子供が求めているものは

教材がつまらないから道德授業が楽しくないと感じている子供でも教材が魅力的で自分にとって面白く有意義であると感じるものがあれば子供は道德授業を肯定的に捉えるかもしれないのである。そこで、もっと具体的に子供に教材の何が不満なのか尋ねると、「真実味や現実味がない」、「主人公のその後の人生が見えない」などである。結果の見えない生き方には子供は関心がなくなることが分かる。

では、子供が本当に求めている教材はどんな内容なのであろうか。「人の在り方や生き方が見え、人生を意気に感じる」、「将来への夢や希望を実現するための具体的なヒントがある」などである。子供が求めているのは価値の理解だけではなく主人公のその後の生き方を知りたいのである。

教材は子供の将来の夢や生きる希望や勇気が見出せるきっかけを作り出せるような教材なのか、生きることの素晴らしさや人生に対する憧れを抱けるような教材なのか、子供が本当に知りたがっているのは何なのか、こうした子供のニーズに応えてくれる教材なのかを求められているのである。

#### 人生は出会いから

指導要領では「個人として、また、国家・社会の形成者としてよりよく生きるため

に道德的価値に向き合い、いかに生きるべきかを自ら考え続ける姿勢こそ道德教育が求めるものである。」と述べている。ここでは道德的価値との出会いが強調されているが、教材は道德的価値の追求の手段だけではなく、子供にとって将来につながるトータルな人間としての在り方や生き方を考えさせるモデルである。そうした意味からも、教材には人間の生活の匂いや生命の流れを感じさせるものが必要ではない。

いい教材は子供に夢を育み、心に感動の灯を灯すような教材である。真実でないものは人の心を打つことはできない。人の心を打つものであつてこそ人は感動するのである。伝記のように人間の真実の姿を伝えるものであるからこそ人は感動するのである。こうした偉人との出会いが人間形成にとって大事なことなのである。

人生は出会いと模倣から始まると言われながら、そうした人物に出会う機会が少ないのである。憧れの人物に出会うことにより、その人物の体験から、時代を超えて人間としての体験を知ることによって人間としての体験を知ることで人間の社会が見えてくるのである。道德授業は人生的視野を広げ、将来への夢と希望を持たせることができる楽しい時間である。闇夜のように先が見えない人生に光が投げかけられたとき、方向が見えてくるのである。教材には夢を持たせる配慮が必要である。

(元鳥取大学)

### 今秋、第一〇〇回大会の開催!!

本学会は、1957(昭和32)年12月に設立され、翌年の1月に第一回学会大会が2日間にわたって日本大学で開催されました。「道德の時間」が話題になっていたこともあり、延べ1,000人近い参加者があり、学会大会の記録は、『道德教育実践上の諸問題』としてまとめられ、同年4月に刊行されました。450頁を超える同書は、当時の状況を伝える貴重な資料です。

それから65年後の今秋。学会大会は、第一〇〇回記念大会という節目を迎えます。大会テーマは、「持続可能な社会を実現するために道德教育に何ができるかー日本道德教育学会が果たすべき未来への使命と役割ー」です。学会の先輩たちが築いてこられた歴史に思いを馳せながら、これからの持続可能な社会を実現するために道德教育には何ができるのか。そのために本学会が果たすべき使命と役割は何かについて、会員の皆様と真摯に考え、議論したいと思えます。

本大会は3年ぶりに対面を基本とし、一部オンラインを併用した開催となります。久しぶりに会員の皆様とお会いできますことを楽しみに致しております。

(第一〇〇回大会運営委員長 目塚茂樹)

#### 編集後記

今夏は、熱波と大雨との闘いでした。被災された会員もおられるのではないのでしょうか。お見舞い申し上げます。

(広報委員)